

# 統一

第百八十八號



明治三十三年二月廿四日第三種郵便物認可  
明治四十三年九月十五日發行第一號第八十七號  
明治四十三年十月十五日(每月一回)十五日發行

(東京 三益印刷株式會社印刷)

目次

信心成就の人	顯本宗監督布教師	能仁事一
天晴會員の登詣を歓迎す	身延山監督	武田宜明
軍隊教育と宗教	陸軍少將	林太一郎
身延御書を拜して	大僧	正本多日生

報道

法華經講演集

(自八三頁至九四頁) 大僧正本多日生

豫約募集

●内容 月次例会 夏期講習會 講演録合輯

●体裁 菊版五號活字十四行三十三字詰約六百頁振假名附裝釘總クローズ金文字入、御聖影御眞蹟等寫眞數葉卷頭挿入

日蓮 鑽仰 天晴會講演録 第貳輯

●正價金貳圓 豫約金壹圓 遞送料内地拾貳錢、清韓參拾五錢、臺樺參拾錢

●豫約申込期間十月三十一日限り、豫約金遞送料相添發行所宛申込むべし、期限後は正價に復す

●製本出來、十二月二十日、申込順に依り發送すべし

●發行所

東京市淺草區新谷町一四

天晴會事務所

曩に天晴會講演録第一輯を天下に發表するや、現代日蓮主義研究の絶好資糧として、時世を警醒し指導すべき著作として、好評噴々、世の思想界を聳動せしめたり、爾來當に周年、本會々員の聖祖鑽仰の態度は、更に一層の熱誠と敬虔とを増し、倍々深く愈々廣く、その大主義大人格に於て、精を究め徹を穿ち、玲瓏八面に透徹せざんば止まざるの概あり、今や茲に昨年九月已來の月次例會講演と、本年七月帝都に一七日間開催せる、夏期講習會の講演とを合輯して『天晴會講演録第二輯』を發刊せんとす、全篇悉く誠意鑽仰の餘蘊、醇平たる信念の熱血なり、或は最近學說の見地を應用して、本化別頭の教觀を發揮せんとし、或は經世憂國の眼光を以て、大主義を實際に應用せんとし、或は熱烈純信の態度を以て、本化の大信念を道被し、或は冷靜公明の頭腦を以て、蓮祖研究の方式を論定せんとし、或は上人の尊王愛國の思想を剖析して、日本君臣の大義を明にし、或は一代の高風徳光を偲びて、品性の修養に資し、或は上人畢世の色讀が、後世幾多の偉人に及ぼせる洪大なる感化を説明し、或は歴史的に日蓮主義消長の跡を尋ねて、千古の疑團を解決し、正義の光明を發揚する等、約六百頁の大冊中に、蘭菊芳を競ひ美を争ふ、卷中藏する所の意義は甚だ深遠なるも、文章は口語體なれば、頗る平易なり、加ふるに振假名附なれば何人も讀解するを得べし、若しそれ一たび本書を繕くときは、坐して天下の名流知識と語り、親しくそが諄々の慈教に接するの思ひあらむ、熱誠求道の志士たるもの、速に一本を求めて座右の寶典とせよ、敢て薦む。

## 本書の内容

### 月次講演の部

一、日蓮上人の尊容に就て……………東京美術學校教授 竹内久一君

一、日蓮上人の勤王に就て……………僧正 脇田堯惇君

一、富士五山に於ける眞蹟對照の實歴……………遺文錄校訂者 稻田海素君

一、非律賓の宗教事情及米國の教育主義……………陸軍參謀本部員歩兵少佐 井上一次君

一、靈格日蓮の愛國心……………海軍大佐子爵 小笠原長生君

一、日蓮上人の筆蹟に就て……………顯本宗々務總監督正 野口日主君

一、日蓮主義と細民救済……………法學士子爵 五島盛光君

一、將來の宗教としての日蓮主義の各方面……………『日蓮主義』編輯長 山川智應君

一、日蓮上人に關する研究……………大日本史料編纂員 鷺尾順敬君

一、高山樗牛と日蓮上人……………東帝大教授文學博士 姉崎正治君

一、佐渡前佐渡後……………『妙宗』日蓮主義』主筆 田中智學君

一、種脱相對の元意を論じて各門流の契合點に及ぶ……………唯一佛教團長 清水梁山君

一、宗教的訓練……………東帝大講師文學士 小林一郎君

一、日蓮主義と實生活……………顯本宗管長大僧正 本多日生君

### 夏期講習會の部

一、迫害に對する日蓮上人の態度……………東帝大講師文學士 小林一郎君

一、日蓮上人の信仰……………顯本宗管長大僧正 本多日生君

一、佛界緣起論……………同宗務總監督 正野口日主君

一、世界統一は誇大妄想なる乎……………東洋大學講師 高島平三郎 君

一、織田信長と日蓮宗……………大日本史料編纂員文學博士 辻善之助 君

一、日蓮上人の大義名分論……………顯本宗大學林教授 關田養叔 君

一、日蓮上人と源光國公……………「村雲婦人」主筆權僧正 松森靈運 君

一、寬……………海軍大佐子爵 小笠原長生 君

一、西人の法華經觀……………マスターオブアーツ 柴田一能 君

一、日蓮主義と大鹽平八郎……………日蓮宗大學長僧正 脇田堯惇 君

日蓮 鑽仰 天晴會講演錄 第壹輯

菊版五號活字十四行三十三字詰八百頁振假名附

裝釘總クローズ 金文字入 紀念寫真數葉挿入

右僅少の殘本あり賣切れぬ内購求せざれば千歳の悔たらん

四

實價金壹圓五拾錢  
内地拾貳錢  
清韓卅五錢  
臺灣參拾錢

發行所 東京淺草新谷町一四 天晴會事務所

信心成就の人

(岡山縣和氣町本成寺に於ける講演)  
顯本宗監督右教師 能仁事 一

一生は夢の上明日を期せず、如何なる乞食にはなるとも法華華にきすをつけ給ふ可からず、されば同じくばなげさたるけしきなくて、此狀に書きたるが如く少しもへつらはす振舞仰せあるべし、中々へつらうならば悪しかりなん、設ひ所領をさめれ追出し給ふとも十聖利女の御計にてぞあるらむと深く頼ませ給ふ可し、日蓮は流されずして鎌倉にだにもありしかば、有りし軍に一定打殺されなむ、此も亦御内にてはあしかりぬべければ釋迦佛の御計ひにてやあるらむ(四條金吾御返事)

俗而私の演題は「信心成就の人」と掲げて置きまし  
たが、凡そ信心と申します事は、人生に於て最も美  
しい事實で、最も結構な事であるといふ理由は平素當  
寺の上人よりお聞きの筈と思ひますが、宇宙の眞理

を體得し法界の實相とを至心に味ひ、世界萬邦に其比  
なき本門の大本尊に合掌し、正信を捧ぐるといふ事は  
洵に人生の眞善美の極致であります、私の信心と申し  
ますのは素より一代佛敎の肝心骨にたる法華の信心  
であつて、その法華信心の成就は如何なる事であるか  
といふ事に就て、聊か説明を試みて見やうと思ふので  
あります、

人間が社會に於ける事業としても、小學校より一生  
懸命に勉強して、中學高等學校と進んで、大學校まで  
行つたとしたところで、中途で退學したならばその人  
は學士にはなれぬようなもので、人としての光榮は學  
問でも實業でも終りまで遣り通して、始めて其處に眞  
の愉快の念が生ずるのである、婦人のお方が裁縫を積  
古なさるとしても其通りで、袴でも羽織でも立派に出  
來上つて初めて其効を見る事が出来るのである、それ  
と同時に師匠の筋を選択する必要がある、生花の稽古  
をしても或は遠州とか専敬とか何れも其筋の通つた極  
意がある、それを双方ともよい加減に誤魔化すやうで

は、決して其人は立派な成功は遂げられぬと同じ道理で、法華の信仰をしても無闇に經を讀み太鼓を叩いたからとて、法華の眞意を得ず、日蓮上人の思召しのある所を能く得心しなければ決して日蓮上人の信徒などといふ事は出来ぬ、日蓮上人の信仰は火も焼く能はず水も漂はず能はざる大安心、如何に寒い時でも暑い時でも、之に打ち勝て始めて尊い信仰の力が實現するのである、そこで日蓮上人は信心成就の肝要を説かれて「譬へば鎌倉より京へは十二日の道也、それを十一日あまり歩みをはこびて今日になりて歩みをさしおきては何として都の月をば詠め候べき」と仰せられて居る、法華經の信心は身請主義と申しまして之は善いと知たならば必ず行ふといふ事になります、近來は實踐道徳といふ語などが頻りに流行致しまするが、支那の王陽明なども知行一致とか知行合一とか申しまする彼の教育界の明星たるヘルバルトも實踐觀念は實行すべしと主張して居る、吉田松蔭の如きも身請主義といふものを唱へて居るのであります、如何に顯本法華宗

(3)

る、しかも病氣平癒の如何に依りて信心を退轉したり或はパンの問題によりて屁古垂れるやうでは、大猫の信心と同様である、何でも諸佛の護念は神聖にして犯すべからざる不可思議である事を信する様でなければ信心成就の人と云ふ事は出来ぬ、恐れ多い話ではあるが、天皇陛下に於かせられても今回の日韓合邦の際などには、賢所に祈り伊勢の大廟に御奉告遊ばされてそして神様の御恩徳を謝せらるゝのである、既に天子様すらも宗教的觀念を受持されて居る、米國のルーオウエルト氏でも亦タット氏でも、神に對して誠意の信心をして居るのであります、而かもお互ひ吾等の信奉する宗教は、姿もあり歴史もある本佛を戴ひて居るのであるから、枝葉の道などに入らずして、本佛の救ひの力を信じて、和氣の名にそむかぬ、鶴をたる信仰を祈ります、二には植諸徳本といふ事である、徳といふ事は自分の口、意、身に、氣をつけて、それに御佛の心を自分の心へウツスこと、即ちみ佛の心を自分の心に宿すことを徳と云ふのである、何でも悪事を慎

の信者であつて、毎朝毎夜方便壽量またお題目を唱へて居ても、少しの事に愚痴を溢したり、又世間の事を怠つては駄目である、信心成就の人として宗祖時代に於ける四條金吾殿の如きは、吾等の常に學ぶべく慕ふべき手本を示して居る、日蓮上人は金吾殿に與へ曰ふて居られるには「百二十迄保ちて名を下して死せんよりは生きて一日たりとも名を上げん事こそ大切なれ、中務三郎左衛門の尉は主の御爲めにも佛法の御爲めにも世間の心根も好かりけり」と述べられて居るのである、又近代の信者にも信心成就の人として主と佛法と世間の各方面に盡れて居る人は澤山ある、法華經の第七卷普賢品に曰く「佛告普賢菩薩、若善男子善女人成就四法、於如來滅後、當得是法華經、一者爲諸佛護念二者植諸徳本、三者入正定聚、四者發救一切衆生之心」この四法を知行して法華信心の成就した人といふ可きである、一には諸佛護念の力といふ法門で、佛の靈妙幽玄なる大慈悲を信じて今身より佛身に至るまでと唱ふる正信者は、必ずや佛果を成就すべきものである

しみ善事を屬むやうにせねばならぬ、譬へて申しましたならば、茲に一家庭の信者があるとして、折角その内の爺さんなり婆さんなりが寺詣りをして、家に歸る否や内の縁が蚊帳をも釣らずに、孫に乳を呑まして居るのを見るや、頭から湯氣を立て、お前はウシが寺詣りをして歸つて來る間に、なで蚊帳を釣つて置かぬ、とガン／＼吐鳴り附く事があつたとすれば其人々々未だ本宗の信徒として、美しき徳を備へた信心成就の人とは言へぬと思ふ、如何にドンドコ太鼓を鳴らしてお題目を唱へても、寧ろ世間の人に嗤笑はれる、所謂宗祖が京より鎌倉の旅程を以て教へられたる如くに、何處までも花の如く美しく月の如く清らかな、雪の如く潔白なる心を以て、信仰の道を進まねばならぬといふ事を教へられたのであります、三には入正定聚と申しまして、これは信心の極意を得る事であり、世の諺にある鱈の頭も信心からといふ何でも主義でなくして、道理の上に立てられた正しき教の根本を握ることでありまして、花を習ふに致しましても、池の坊より

専敬に變りましたならば、其筋の極意も變る、裁縫を習ふても針の最後のトメといふものを上手にして、初めて裁縫の價値が顯はれると同じく、信心をするに就きましても、何でも來いの放漫錯雜なる主義は、決して日蓮上人が教へられた方法ではありませぬ、吾等が一心に合掌して佛に誓ふ正義の信仰は、向上的意義を合める大信仰である、「日蓮が魂を墨に染め流して書ひて候ぞ」との給へる大本尊に正義の信仰を起さねばならぬ、信心はするともウロケナル者は法華信心の人とは言へぬ、一心合掌といひ一心欲見佛といふ事は、吾等が半平不拔の大信念を表現したる無形の姿である、信する所は諸經中王最第一の法華經であつて、仰ぐ所は釋迦日蓮の聖訓であります、四には發救一切衆生五心と申して、一切の萬物を憐む慈悲心であります、開祖上人の御歌にある如く「門に立ち物を乞ふ人の聲聞かばあはれと思へほどこそさすとも」の御真意の如く、吾等は信徒として世間の慈善事業に對しても十二分の力を盡さなければ、其人は信心成就の人といふ事は出來

ないのである、例せば今回東京地方に於ける大洪水の如き地沃の災難に對しても、吾等は他の者共に率先して此社會事業に奔走するやうにせねばならぬ、斯の如く信仰が力となり、信仰が光りとなつて、社會各方面に渡つたならば、諸佛は護念して下され、御本尊感應の靈力は實現して來るのである、一に慈悲、二に積善三に正義、四に道徳、この四法を能く克く心得て法經の信仰をする人を信心成就の人といふのであります、故に既に信する人々は益々深く修行を積み未だ信仰の道に淺い人は愈々信仰の増進を心懸けらるゝ様切望する次第であります。

（天竺し形二卷第十九號より轉載す）

天晴會員の登詣を懽迎す

身延山監督 武田宣明

山内を代表して一言歡迎の辭を呈します  
本多大僧正親下及林少將閣下を始め天晴會會員諸君

は、遠隔の地特に洪水後道路の險惡なるをも厭はせられず、斯る山間僻陬の處に登詣し參拜せられたる御篤志は、以て各位が信念の堅固なるを證すべく、深く感佩に耐へぬ次第であります。何分山間の地萬事不自由に於て、何等各位遠來の勞に酬ひ、旅情を慰むる程の佳肴もなく美味もありませぬか。幸に宗祖大上人の埋骨極神の靈山は、無恙空を吹く風の颯爽たる溪を走る水の潺湲たる。皆是れ六百年前の音聲にして、松の天を摩して聳へ杉の峰に高く茂りて、自から本地の法門を語るが如く、一石一塵皆是れ宗祖が御靴の痕を留め、山容水聲皆是れ大上人遺愛の風光にあらざるものはありませぬ。蓋し夫の風光や形勝やは無盡藏でありますれば、各位が擲まゝに掬し來り掬し去り、看し來り看し去るに一任致しませれば、充分に咀嚼し玩味せられて、信念涵養の一助とも成り、旅情の慰藉とも成りませば幸甚に存します。

よ。心はよめども身によまず。色心二法共にあそばされたるこそ貴く候へと仰せられましたが。方今天晴會の各位諸君は、恒に口に經を誦し唱題し玉ふは勿論常に心に思ふて宗祖大上人の教義を研究し、其の研究したる結果を或は國家の上に實現し或は社會の上に實踐して、知行合一色心二法共に法華經を讀み玉ふ。眞個に日朗上人の遺志を體認せられ、總ては宗祖大上人の御褒美にも預るべき資格ある各位の集團なる事を余輩は田舎に在て遙かに認めて、恒に敬意を拂ひ益々其發展を祈りつゝあるのであります。今其の明治の日朗上人の集團とも謂ふべき天晴會各位の登山せらるゝを迦ふ余輩は、洵に衷心より歡びに耐へませぬ。特に又た顯本法華宗の本多大僧正親下及び學匠各位並に信者諸君は、縱令今日は天晴會員の資格を以て登山されたるにせよ、宗藉は依然顯本法華宗に在り。特に本多大僧正は其宗の管長であらせらるゝにも拘らず氣宇洪量多年隔意の城壁を打破して當山に登詣し、大上人の墓前に參拜せらるゝと云ふ事は、實に近來破天

荒の痛快事であつて。本山は好個の新しきレコードを成したるを喜びに堪へません。是れ或は他日從來持續せる宗義問題の衝突及び感情上の扞格を一掃して乾坤を一打し。日蓮大上人の御門下を打て一丸と成し。宗教界の一大勢力を建造する瑞相でありはせんかと思ひます。否な畏くも宗祖か威靈の引力を以て右様成さしむべく。此に各位を幸き寄せられたのかも知れません。

當山には古より御頭講と稱して年の始めに御年頭講の例式があります。即ち正月の十三日晩近は唯だ近末寺院及び本願人のみか。朝早くより登院して。貫首と御盃頂戴の式がありまして。式を了て後は境内に於て近在より幸き來れる馬を驅らせて。高祖の寶前に供へるのであります。寛文三年の記録に據りますと。御年頭講の客座席には。舊一致派即ち今の單稱日蓮宗の諸本山京都本國寺妙顯寺中山法華經寺池上本門寺等は申すに及びず。即ち本多大僧正の御住持寺なる京都妙滿寺。富士大石寺等の諸本山も載て居りまして。其當

罪人と爲つたといふ事は。哀れ至極と謂つべきでありません乎。

乍併今の人は。必皆其非倫理なる事を自覺して居らるゝに相違ないといふことは疑ひません。乃ち今時身延無間山呼はりをするやうな馬鹿ものゝないのを觀て明了かである。が或は世間體とか何とか所謂舊慣に泥みて奮起決行の勇氣に乏しくて。公然參拜せやうと思ふても未だやうしない様な人が澤山あらうと思ひます。然るに本多大僧正親下及び各位は二百年來結んで解さる舊慣迷霧を打破して。整々堂々各位相携へて參拜せられたる事は。實に近來の快舉でありまして。余輩の感激に堪へざる所以は此にあるのであります。蓋し思ふに宗祖大上人の神靈は宇宙の大靈本佛と冥合して。天の月の水在る所に影を映して惜まざる如く。高原の燥ける土を掘れば孰れの所でも水の湧き出づるが如く吾人の正直の願信念の水澄まば。必ず宗祖の靈を宿し誹法邪曲の高原を掘り盡さば。必ず大上人の威應はあるに相違ありません。ゆえに宗祖の神靈は獨り身延の

時は各本山の貫首なり或は代理者なりか必ず登山して個般御年頭講には列席せられたものと見える。蓋し個の各本山列席の事は寛文十一年頃即ち今より二百二三十年前迄は行れて居たが。席争ひか何かが出た爲めに竟に廢され。諸本山の列席はなくなつたのであります。當時とても固より教義上の不一致たる事は免かれぬのではありましたらうが。兎も角も宗祖大上人の栖神埋骨の靈地たる事實は天地のあらん限り到底抹殺する事は不可能であります。されば縱令教義問題に衝突があり信仰觀念に多少の相異があらうとも大上人埋却の靈骨とは關係なく致交渉の理なれば。一年一度位は御年頭なり或は其他の時なり靈廟に參拜すると云ふ事は。教義問題を別として道徳上當然の義務であらうと信じます。然るに前にも述べましたる通り寧ろ教義問題と云ふよりは感情問題の爲めに。坊主憎ければ袈娑まで悪してふ非倫理に陥て。能派からは漫りに身延は無間山とか誹法の山とか冷罵惡罵を極めて。あたらず宗祖大上人の靈骨に濡衣を着せ。自からも亦非倫理的

山にのみ留まつて居るといふ理はないやうである。が宗祖は身延の風光を愛して當山を埋骨栖神の地と自ら定められたのであります。御臨終の御年弘安五年九月十九日池上に着してから後ら波木井殿に禮狀を送られた御書にも。九年まで御歸依候ぬる御心さし申すばかりなく候へば。いづくにて死に候とも墓をばみのふさわにせさせ候べく候と仰せられてある。又た金吾頼基へ賜はつたには人々の語は様々也しかども方方存する旨依。有。當國當山に入て已に七年の春秋を送るとお認めになつてあります。當時愈々鎌倉幕府の下を去て何れにか退藏せんと遊ばしたる際は。多くの檀方の中には或は伊豆の人は伊豆へ請待しやう。武藏の人は武藏へ下總の人は下總へ聖望するのが人情の然らしむる所である。然るに大上人は开を謝絶して方方御所存が有つて此山を御擇びに成つたのである。されば御書中に屢次身延を以て釋尊が法華經を説かれたる靈鷲山に比し。又た天台大師の止觀を説かれたる天台山に擬し玉ひたる事は深き以ゝること、信じます。之に依

て此を觀すすれば苟くも日蓮大上人の教義を奉じ精神的の救済を齎する程のものは。其在家と出家とに論なく當山に參拜する事は當然の義務でもあり。且つ當に宗祖遺愛の溪山風光に接し六百年前を偲ぶ而已ならず古教傑の靈骨に咫尺して靈光に浴びるの感あり。蓋し精神上の利益も甚なくなからうと信じます。個は決して引水我田の言ではありませぬ。今や本多大僧正親下を始め天晴會を員諸君子が率先以て這般の快舉を取て天下の木鐸と爲られた。特に又今日茲に講演會を開て各自の信仰研究の蘊蓄を披瀝せらる。宗祖大上人の靈や等爾として各位を擁護し給ひつゝあらんと恐察致しませぬ。然り各位が今回の快舉は益以て他日我が大上人御門下の信仰統一に資くべく。偉大なる効果を招き來さんことは必然にして。宗門の祝福は之に過ぎたるものはありませぬ。於茲乎聊か擁護の辭を呈し併せて各位前途の健康安全を祈ります。

(元)

(天鼓より轉載す)

### 身延御書を拜して

大僧正 本多 日生

此の度天晴會員と共に登山する機會を得たるは眞に喜びに堪へませぬ。殊に會員中熱心なる林少將を始め會員諸兄と未見の山水を見未參の靈場を拜したるこの數日の感想は。眞に終生の快事でありませぬ。また本日この本山にては法主親下よりは殊遇を賜はり。監督武田宣明師よりは歡迎の辭を蒙り。誠に感謝に堪へん次第でありませぬ。

私の父母は日蓮上人の信者でありましたから私が六七歳の時から上人の御傳記を朝夕聞かせられ。其の時から何時となく上人の靈場が私の頭に入つて居りました。私は十三の時に出家しまして有名なる日容上人を師と仰ぎましたが。師の膝下にも日々御傳記の物語りを承りまして。幼ながら自分は身延山は聖祖が

九ヶ年御閑居の靈地であると思ふに付け。思親閣の御有様は如何。眞骨堂は如何と種々の方面より未見の身延を想像致し。人にも聞きなどして。夢寐の間も忘れぬ暇はありませぬ。然るに今日正に自ら身をこの聖蹟多年渴仰の地に運んで参りまして。親しく御眞骨を拜し。また天子嶽鷹取の峯などを見まして。聖祖當年御閑居の有様を思浮べますと。無限の感慨に打たれ言ふべからざる感想が湧てくるのであります。而して今この清浄なる講壇に起つて。この言ふべからざる感想を諸君に訴へることは誠に愉快の至りであります。これぞ聖祖の御靈威が 私等をして茲に引寄せ玉ふたのであると信ずる。殊に當本山法主は天晴會員の一人として天晴會の發會式にも御出席被下をしまして。天晴會の盛衰を念とし玉ふて居らるゝ方でありませぬので。この御厚志に對しても私は喜んでこの演壇に立つた次第であります。

本講題は昨夜主催者たる天鼓社から講題をと云ふこととで有つたから。取り敢へず「身延記を拜して」とし

て置きました。これは未だ身延山を拜せない前であるから。未見の身延として御話を致すつもりで有りましたが。今日は既に身延山を拜して居りますから。「身延山を拜して」でなければなりません。而し敢て改題もせず矢張未見の身延のことにして御話しいたしませしやう。

身延山に於て御製作に成りました御遺文は澤山あります。身延記は建治元年の御作で尤も宗教的の活きた實感が顯はれて居ります。宗教的生活の御有様が活躍して居ることは。この御書が第一でありませしやう。人間の活きた精神が宗教の大神隨に觸れて活躍して居るのが。宗教的實感と申しまするので。法悦とか法喜とか申すのもこれのことでありませしやう。宗教には其の一面に於ては宗義宗學と云ふことが必要であります。此實感と云ふ事柄は決して輕視してはならぬ。我宗は未來の觀念に捕へられて居る人を實世界に調和せしめ。立正安國を理想として人生に強き力と與ふるのでありまして。前席の林少將の望みは大上人の教へ



に依て満足せらるゝことと思ふ。宗教の真髓は何れにあるかと云ふに。如何なる哲學も倫理も其の根底に於て能く調和して。無限の活力を以て人生に及ぼすのでありませうから。宗教信者となりませうと勇氣忍耐等自然に大なる力を與へられる様に成るのであります。哲學や倫理を學ぶものは宛かも白酒の製造法を知つた様なもので。製造法を知つた計りでは聊かも其味を得る所がありません。また宗教の實感と云ふことを考へずに居る人は。丁度白酒の瓶を洗つた後の水を飲んで。白酒を飲んだと思ふて居る人と同じとて。決して眞の白酒の眞味は知れるものではない。世にはこの製造法計りを聞いて満足して居る學者と。白酒を入れた瓶を洗ふた水を白酒だと思ふて飲んで居る信者とが多い様に思はれます。

身延記は大上人が御草庵に在して思のまゝを御かき遊されたのでありますから。此の御書中には宗教的實感が活躍して居るのである。實感と云ふはこの心の境にのぞんで思はず知らずに感じた所に起るものであ

華經的御生涯を送り法の爲め奮闘し來つて。最早心にかゝる雲もなく眞に愉快の生涯を送ると云ふ。心の喜びが此の山川の美しき自然に對して思はず實感上の御言葉と成つて顯はれて來たので。この御歌が宗教上に大なる意味を語り。而して大なる感化の力を生むわけでありませう。この御歌の意味は立こめ渡れる我が身の浮世さまの迷雲は悉く鷺の御山の妙へなるものに依て拂はれ。最早何にも心にかゝる雲もなく。眞に眞淨無我の境に入り眞の大安心大平和の境に入らせ給ふた。身延御幽居中の御實感を述べ給ふたことであるから。決して未來にまで引及ぼしての御言葉とはうけとれず。又た未來にまでかゝることとして身延記の實感をのべ給ふたこと、調和せぬ。少しく不穩當の厭ひがあると思ふ。これは絶へぬと云ふ不羈の義でなく。妙の法り妙法の意であることは勿論である。絶へぬと云ふ未來の語として考へれば今現在に浮雲の晴れ渡れる御聖居の御心地と相一致せぬことである。このことは先頃玉澤の久保田僧正に御面會のせつも御

つて。これを形式の型に入れて説明して理窟を付けるものではない。今日の一行が富士川を船で下りますにも。水が激して船に當りまして激浪澎湃船も覆へらんとするとき。何故か一同思はず萬歳を唱へる。この時萬歳を唱へるは理窟に叶ふて居るかどうかは知りませんが。この萬歳は眞に愉快に何の飾りもなく思はず叫ばれたのであつた。而してこの萬歳は覺えず一行の志氣を鼓舞して居るのであります。身延記は即ち宗祖が御閉居當時の御有様を心に浮んだまゝ筆に顯し玉ふた御文章で。實感の大なる所を説明して居りますから。この御文を讀むと何んとなしに自と自身がこの身延の聖境に來つて。聖祖と身心を共にする様な感も起るのでありまして。實感上の文章言論の人を化することは實に大なるものであります。

身延記の最後にある「立渡る身の浮雲も晴れぬべし妙の法の鷺の山風一の御聖歌は。唯今では宗歌と成つて日宗大學でも田中君の講習會でも顯本法華宗でも一様に唱ふるのであります。是れは宗祖が今日迄の法

話しいたしましたら。矢張御同感だとのことでありました。また先程拜見いたしました身延山の藏書中三百年前の身延鑑中巻七丁の所にも。妙への法のと成つて居りますし。また寶物記録にも絶へぬでなく矢張り妙への法りと成つて居ります。これは無論大上人の御歌は妙への御法の鷺の山風とあつたに違ひなからうと思はれます。この大上人が主義主張も顯れること晴れ渡る空の如く。法華經の奉行も進みまして妙の法の貴き生活に移ることは。人格の大上人は既に神格の力と成つたことを詠せられたもので。またこの身延が既に神格の靈土として常住不滅であると云ふことを。理窟に言はずして實感上の言葉を以て歌はれたのであります。然れば馬の座がある身延が靈山かと言ふ人があるであらうか。これは信仰の靈化に打たれないものには解らないのであるから。宗教には實感上の問題が尊いのであります。この御書の冒頭に「誠は身延山之栖はちはやふる神もめぐみを垂れ天下りましますらん」云々と書き出し給へるは。この山に對して大上人が實感

上の御言葉である。「心なきしづの男しづめ女までも心を留めぬべし」とは。この實感の力が總てに活躍して居る證據である。かくまで深く感じてこそ。秋の哀れの景色の優美なる所も。紅葉の名所として名なる龍田川の水上も。歌聖人丸が詩歌によまれた和歌の浦でも。この身延山の景色に及ばぬ様な。眞に愉快な風光で有つて。また安樂な理想境である様に見へるのは。この書の遺憾なく感取されて居るのである。これが實感上の尊い所であつて。又た信仰者の價のあるところである。紅葉を見るには龍田川へ行かねばならず。花を見るには上野へ行かねばならぬ様にては。人生上何事も出来るものではない。この美しき所を自身の居所に持來つてこれを實感すると云ふのが。宗教的實感の力である。人間の欲望は限りないのであるから。餘り形式に拘泥して居つたならば。決して満足を得るものではありませぬ。此の如き欲望を宗教上の實感に移して満足するのが。眞の満足安心とも云ふべきものでありまして。この御書は第一これを教へられて居りま

常であつたと知れば獅子に身を施す方が宜しかつたと申して。南無歸命十方我が心の淨くして已むことなきを知り給へと唱へました。この時天の帝釋がこれを知りて帝釋宮から天下りまして井の中より狐を救ひ出して更に法を説き給へと乞ひますと。狐の言ふ様不思議にも法を聞く方が上座して教へる方が下座することよ法を輕めるものには説かないと云ふ。そこで帝釋は再び座して法を説くことを願ひました。すると今度は逆なる哉師も弟子も同座なることと申しましたから。帝釋天は諸天の衣を脱ぎ重ねて高座といはし。この上に登せて法を説いて貰ひました。則ち狐説て申す様「生を樂ふて死せん事をにくみ。又人有りて死せんことを願ふて生んことをにくむ」と。帝釋天は狐を師と致しまして此の通り法を聞きました。これを天台大師は養臭きをもつて金を捨つること勿れと釋し。上人も此を引いて如何に賤しきものにも法を持つて居るものを忽せにしてはならぬと御戒めに成つて居ります。而して狐の言の如く空しく死すると云ふことは日蓮主義の

す。故にこの書を拜しますれば知らず。實感上の美しき觀念が起つて参ります。

次に此の書は教へを大切にすることを説いてあります。法貴きが故に人貴し人貴きが故に所貴しの教訓を示されてあります。如何に身延山が靈地でありまして法が濁つて居つたならば。決して靈地ではありません。この事は雪山童子の事や又た種々の事柄に寄せて御話に成つて居りまして。御承知のことではありませうが。今御書中の一文即ち弘決の四を引かれて御説きに成つて居る事柄に就て御話を致しませう。

昔し毗摩大國と云ふ國に狐がありまして。この狐が獅子に追はれて濁井の中に落ちました。獅子はこれを知らず井を飛越して行てしまいました。されど井は深いものであるから狐が上がらうとしましても。中々上がれないので。井の中で餓死せねばならぬと云ふ破滅になりました。其時狐は文を唱へて云ふ様今獅子の禍を通れたもの、空しく井の中で死するならば。寧ろ饑きに獅子の餌食と成つた方が益しであつた。萬物皆無はならぬことであります。

人は肉と靈とに依つて作られて居りますから。全く缺點がないものはありませぬ。大上人が「人心に似て畜身なり」と仰せられたも能く人の缺點を言はれたので肉の上に於ては人畜左違別のことではありませんが。教を持つと云ふことに於て區別されるのであります。「日蓮は旃陀羅が子なり」と雖も法華經を持つが故に佛の使なり」と仰せられたのは。法の尊重すべきことを御示しに成つた御言葉であります。

つまり教を先きとするは身延記の大主眼大眼目であります。身延山は其の内容精神に於て勝れて居るのであります。若しこの山にして教へを輕んじたならば全く身延山はないわけでありませぬ。然るに稍ともすると門前の人々の無信仰に流れ易いのは。其の形の身延山計りを知つて。其内容の教を重んぜない爲め。僧侶の缺點のみ數へる様になるから。勢ひ無信仰者に成るので

ありませぬ。西診に下女の眼に賢人なしと云ふことがありませぬ。下女が朝夕起臥を同入して居ります。其の外形のみを見て居りますから存外缺點が見へて。如何なる賢人も常人の様になるのであります。一巻の書を読みましても精神の起つて居るものが読みますればやたらに多くの書を読んだものよりも。其の實力を養ふことに於て進んで居りますが。此等の點に於て精神を先にすべきを教へられて。長者の高燈より貧女の一燈を尊しとせられた御言葉があるので御座ります。世には萬燈信者で形の上に計りて精神のないものが多い。高燈信者風が吹けば無い勢。と云ふ諺の通り。其の光りは形の上計りでありましては何の爲めにも成りませぬ。一巻の書を読むにも上人の靈感を得れば已まないと云ふ決心を以て読みますれば。萬巻の讀書にも勝ります。

今我等が宗祖棲神の靈地たる身延に詣で茲に諸君と見るのも。一念宗祖を慕ふの心より外にないのであります。この教を重んじ道を慕ふの心が有つてこそ。こ

然るに今日は身延山へ参詣いたした紀念に是非何にか話を致せと言ふので御坐います。私が從來公衆の前で演説などはいたしたことはありませぬ。殊に最前より諸講師方の有益なる演説が御坐りました後でありますから。私が訥辯を以て別段演説する程のこともありません。實は本多僧正より何にか諸君に御話しを致せと云ふ命令でありまして。吾々軍人にありましては。上官の命令は説の可否善悪は問ふ所にあらず。絶対に服従するの義務あるものと心得て居ります。またこの命令に服従するを以て無上の光榮と致して居ります。今本多僧正よりの命令は其の適否を考ふる暇なく。殆んどこの命令の爲めに余をして無意識にこの演壇に立たしめた次第であります。が様な始末故今は唯命令を果すのみでありますので。別に講題と云ふものはありませぬ。

扱て今日に於ては宗教は必要なりや不必要なりやなと云ふ時代ではありませぬ。我が軍隊などには殊に宗教を置く必要がありませぬ。諸君も御承知の通り各國荷

の山へ参りしても。貴き實感上の感想が浮んで来るわけでありませぬ。若しさうでなかつたなら身延の山も他の山水も別して變る所はありませぬ。最早時間も切迫いたしましたからこれにて御別れ申します。(大要筆記文責惣て記者にあり)

(完)

(天鼓より轉載す)

### 軍隊教育と宗教

陸軍少將 林 太一郎

私は日露戦役後は殊に多忙の身となりましたが。殊に本年は水害其他の爲めに愈々多忙でありまして寸暇も御座りませんが。この度天晴會の有志諸君が身延山参詣を企てまして。私にも同行をとのお奨めでありまして。私も久しく身延山へ参詣いたしたいと思ふて居る矢先さで有つたから。休暇を頂戴いたし御同行を願ひましたので。これも大上人の御誘引ならんと思ふて感激に堪へない次第であります。

も文明國と稱する軍隊に無宗教の軍隊はありませぬ。就中魯西亞の如きは殆んど宗教的に軍人を教育して居ります。今軍隊教育には何故に宗教が必要であるかは私が敢て陳々を要しませぬ。諸君に於て御了察のことゝ存じます。

要するに宗教は何事にも安心立命の感を抱かしむるのが本意でありませぬ。軍人教育の上にも尤も緊要なる次第であります。換言すれば如何なる難事に際會し、ましては任務の爲めには萬難を排除致しまして。この任を實行する。これを實行するの精神を涵養するの第一宗教に於て養はるゝところでありませぬ。

私が軍人としてこんな考へを起す機會に屢々遭遇いたしました。私は日清戦争當時は名古屋師團の大隊長として出征しましたが。私の率ひたる名古屋の壯丁は三河美濃等の多く眞宗の盛なる所でありましたから。私もこの信仰の盛なる兵卒を卒ひて出征したわけでありませぬ。丁度出征の爲め名古屋を出発しました日京都驛に於て卅分間の休憩時間がありましたから。私は

この時間に自由行動を執らしめた。すると兵士は皆一様に六條の本願寺に詣で、汽車の中には唯れ一人残て居るものはありませんでした。すると私はこの三十分間に果して能く兵士が間違ひなく歸つてくるであらうかと危ふんで大に心配したが。やがて廿五分ほどたつと兵士は一人残らず歸つて来た。私はこの時始めて左様思ふたが。信仰あるものは萬事が規則正しく行はれるものである。其後この兵は滿洲に渡りまして折木城牛莊等に戦ふて拔群の功を顯はしました。又た日露戦役の時は私は伏見の旅團長として出征し。この伏見近方の壯丁を引率して戦争致しました。この地方も又た眞宗の信仰の盛んな所でありまして。宗教的感化の力が壯丁に及んで居つたものと見へ。萬事規則正しう御坐りました。大津京坂地方の兵は比較的柔弱なるに。この兵士が地方の普通に比して能く戦ふたと云ふのも矢張り宗教的感化であると思ふのであります。日清戦争は左程困難の戦はありませんでした。殆んど百戦百捷と云ふ具合でありましたから。左程考ふ所もあ

究して見ますと。全く我が希望せる宗教と合致して居るのであります。果して然らば日蓮宗をば直に軍隊に持ち來つて宜しいのでありますかと云ふに。是れは比較的事で有つて。全く左様に行かぬ事柄がある他宗とも決して殊長がない譯でないから。むげに排斥してもなりません。今の様に幾多の宗教が雜居して居ては。實際上軍隊教育などには差支を生じます。依つてこの宗教を悉く一丸として統一した上に。日本の國教を成立して。この國教を以て軍隊を教導したならば。軍隊教育の萬能を得たものと存じます。

而してこれは大問題でありまして容易には行はれぬかも知れませんか。猶ほ一層適切に急務であらうと思ひますのは。かく數派に別れて居ります日蓮門下を統一することでありませぬ。宗教を統一すべきところの宗教が幾派にも分立して居ると云ふことは。條理としても許されぬことであります。この統一は各派管長の責任で有つて。而して信徒はこれを助くるのか當然の務めであります。これが宗門發展の第一歩であらうと思ひ

りませんでした。日露戦争は随分困難の戦争でありました故。兵士としても唯能く戦ふと云ふ計りではいけぬ。また能く戦ふ中にも最後の一分と云ふ所で稍やもの足らぬ感を感じたのであるが。是れは何故かと云ふにかゝる困難なる苦しみ堪ゆるよりは。寧ろ早く死して彌陀の淨土に行つた方が増しであると。終に厭世の觀念を起す様な薄弱の思想が交つて居るからではあるまいかと思ふ。死を畏れないと云ふことは宜しいか。死するに付ての務めを盡くすことを忘れてはならぬ。

私が軍隊教育に必要とする宗教は。こんな厭世的宗教では無論駄目である。「徳を健全にして如何なる困難にも堪へ忍び。然る後任務の爲めに斃れて止むの覺悟」を鼓吹する宗教こそ。軍隊教育に付て必要とする宗教である。然して此れに適應する宗教は果して如何自分の理想は此の如く厭世的にあらすして進取的に忍耐強く。どこまでも日本的なる宗教を要求して居るのであるが。私か大上人の御理想や御生涯の事柄を研

ます(文責記に記者にあり而して本講題は記者の私に設けたる所なり) (二二)

會津妙法寺本堂再建寄附金領收報告(第五回)

金拾四圓	第三、四回	吉田日宜	金參圓	第二回	金坂義昌
金拾五圓	第二回	山根日東	金四圓	皆納	田島義潤
金六圓	第二回	飯倉日和	金五圓	第二回	關田義叔
金四圓	第三、四回	大須賀芝道	金五圓五拾錢	第二、三回	吉田義春
金壹圓	第二回	安藤日莊	金拾五圓	第二回	萩原啓門
金五圓	第一回	山田日廣	金壹圓	皆納	本村義明
金六圓	皆納	有田安道	金五圓	第一回	前田日真
金貳拾五圓	皆納	竹内無著	金貳圓五拾錢	第一回	萩原春雪
金五圓	第一回	梅澤天純	金參圓	同	鈴木純賢
金拾五圓	第二回	飛山日南	金參圓	同	佐野泰智
金拾圓	同	津田察園	金壹圓貳拾錢	皆納	御園榮項
金壹圓	同	齊藤立靜	金五圓	第一回	岩崎會真
金拾五圓	第一回	伊保内教守	金貳拾圓	皆納	小池輝碩
金參圓	同	石塚日綠	金壹圓	同	妙立寺
金五圓	皆納	清水純榮	金貳拾五圓	第一回	野中玄通
金參圓	同	朝倉一乘	金拾五圓	同	白井日慶
金壹圓	同	木下圓通	金拾五圓	同	岡本圓正
金七圓	皆納	佐々木英春	金四拾圓	同	武藤顯誠
金壹圓	同	栗田日滿	金貳圓	同	榎木日順
金拾圓	同	佐藤禪喜	金四圓	同	木村日順
金七圓	皆納	吉田義孝	金拾圓	第一回	鈴木顯真
金壹圓	第一回	前田日教	金五圓	第二回	齊藤顯一
金拾五圓	皆納	廣高乾山	金五圓	同	朽木日尊
金五圓	同	野日日主	金貳圓	第一回	日比野日進
		石井寛後	金貳圓	皆納	板倉通猛

金五圓	第一回	松井波安	金四圓五拾錢	第一二二回	佐野日保	金貳圓
金參拾四錢	第一回	本光寺	金壹圓五拾錢	同	秋葉日度	金半圓
金九拾錢	同	桂徳寺	金五拾錢	同	妙慶寺	同
金參拾四錢	同	本泉寺	金壹圓七拾錢	同	本城寺	同
金壹圓四拾錢	同	善立寺	金壹圓五拾錢	同	常運寺	同
金壹圓貳拾錢	同	法蓮寺	金拾五圓	同	山岡會後	金參圓
金拾圓	同	橫濱目黒	金五拾錢	同	金坂義昌	金四圓
金五拾圓	同	中田日	金貳圓	第一回	海老澤乾樹	全
金貳圓	同	鈴木智政	金參圓	同	因橋善英	全
金一圓	同	増田聖道	金五圓	第一回	藤崎通明	全
金參拾圓	同	山本日信	同	同	同	全

千葉縣片貝教行寺禮家

石川ふみ	金貳圓	石川久太郎
石川淺次郎	金半圓	中村 磯吉
花澤元修	金五圓	鈴木 幸吉
古川靜一	金四圓	高橋源之助
齋藤吉三	金參圓	花澤勝治郎
古川伊之松	全	飯島 芹吉
古川銀太郎	全	谷川 水藏
谷川國太郎	全	古川 長八
古川其從	金貳圓	平塚源太郎
古川 要	金壹圓半	中村 安藏
古川 儀八	金壹圓	野口 直吉
梅野保太郎	全	高橋吉次郎

教學財團基金申込報告

第三十七回(四十二年九月三十日迄分)

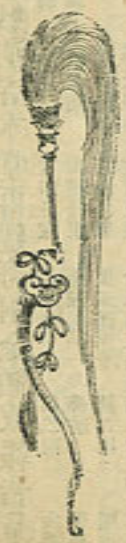
▲護持會員 千葉縣長生郡長柄村力丸妙教寺壇家 石川忠一 郎  
 ▲正會員 同縣勢田清龍寺壇家 森 岡 金 三

▲通常會員 東京府品川妙國寺壇家 岩 井 フ ナ  
 千葉縣幸田本光寺住 片 岡 義 慎

▲賛助會員 千葉縣力丸妙教寺壇家 石川伴次郎

金參圓 三枝新一郎 金參圓 石川伴次郎

小計百七拾圓五十錢也



報 道

△護持參拜 天晴會員本多日生師一行十七名は聖祖遺藏九ヶ年の聖地身延山参拜のため九月三日東京を發し途次甲府に於て天鼓社主盤の歡迎講演會にて左の講題の下に日蓮主義の卓越せる特長を演べ其自覺と信仰とを喚起するの實力を興ふるものありて聽衆千餘頗る盛會なりしと

日韓合邦と日宗徒の覺悟

辯護士 吉田 珍雄君  
 日韓合邦と日蓮宗 僧 正 野口 日主師  
 所感 小笠原 丁君  
 身延前の日蓮上人 辯護士 松本郡太郎君  
 健全なる宗教の實例

大僧正 本多 日生師  
 五日深山朝明なる身延山に登り小泉眞主武田監督其他の被格の優遇案内によりて遺書靈照を拜し一行皆雄偉なる靈光に接して靈感無限なるを覺へ修養研鑽に資するもの多し延山は大書院に大講演會を開き美田天鼓記者の開會の辭を宜へたる後左の講演を爲せり

辯護士 吉田 珍雄君  
 吾人の所感 辯護士 小笠原 丁君  
 参拜の實感 僧 正 野口 日主師  
 靈照に就て 辯護士 松本郡太郎君  
 御入山後の日蓮上人 辯護士 林 太一郎君  
 所感 陸軍少將

身延記を拜して 大僧正 本多 日生師  
 講師は熱烈の辯論を以て其所感を發表し特に日蓮主義者は小感情の城壁を撤退して統一的大理想の下に集まり共同活動の努力によりて宗徒の天分を完成すべきを説き和氣協々嗚乎拍手の裡に教會を告げたりしも古來延山にては登詣者にして講演を爲せるものなしとの事なれば未曾有破天荒の舉にして破格の歡迎と稱すべく是れ之を聖祖の大理想の下に統一を完成し依之進而瀟洋歸妙の大理想を實現すべき祥瑞にはあらざるなきか一行は六日身延を辭して歸京の途に就きしも本多大僧正外數氏は三保の田中先生を訪ひ八日歸京せられたりと云ふ

△天晴會九月例會 九月二十四日午後四時より九段信行社に於て例會を開けり開講の宣言と共に登壇せられたるは軍艦宗谷の副長吉田中佐にして艦隊巡航中の所感なる題下に濠洲地方に於ける日本人の信用態度を評し概して宗教上の觀念に乏しく從て精神統一なく正道に依て向上し永久に發展するもの少なきは國家發展上一大缺陷にして大に宗教上の熱誠なる信念を養はざる可らずと論じ法學士山川瑞夫君は國際的平和事業と題し文明と戦争と平和との交渉に就て論じたる後眞の平和は宗教的融合を基礎とせざる可らず西洋人は日本人が自ら無宗教と稱するを恠みしれば彼等の日本人を日本に信仰なき國民と誤解し得ず也佛敎は日本にあれども未だ彼等に解し得ず吾人大に奮起して日本に日蓮上人在すことを知のしめかくて東西思想の融合を實現し來れ

ば世界の平和期して待つべき也と結論し講演終りを告げ晩餐會に開かる食卓の議論大に賑ふ時博士は岩田少佐の轉任送別の辭を述べ本多僧正は身延紀行中の靈感を告白し慈田賢正は金澤講習會の状況を紹介し皆趣味と實益ある談話によりて解仰の歩を進むるものありしと云ふ

△九月の東京 第一義會の九月例會は十一日午後一時半より開會し修法の後

功徳論 野口 日主師  
 日蓮主義に就て 本多 日生師  
 の講演にて多大の法益を興へ妙教婦人會は十六日午後一時より修法の後

信仰の要義 山根 日東師  
 佛敎の女性觀(其二) 本多 日生師  
 の講題にて懇篤熱心に説き去り説き來り至誠信仰の妙味を興ふるものあり聽衆は多大の満足と希望を以て眞面目の態度にて傾聴し傾續々入會の申込ありて漸次盛況を呈しつゝあるは可喜事也日蓮主義青年會は十八日開會し本多僧正の導師にて法要嚴修の後

先づ信ぜよ 今成 乾隨師  
 祖再研究に就て 本多 日生師  
 講題を掲げて熱烈の廣長舌を振ひ日蓮主義の大教法に依りて堅實なる信仰を掘住し現代潮流の潮流に掉す青年は特に上人の高風徳化に接觸して向上自強の計路を進まざる可らざる所以を懇説せられ聽衆は偉大なる靈感に打たれて意氣昂然各自の天分を自覺するに至りしと云ふ

### 岡山通信

▼日蓮研究会 九月三日第一土曜日午後七時より本行寺に於て開會せり會する者三拾餘名高木本願師の聖語、人身寫事具章(外廿數行證法)の約一時間半に渉る講演あり、それより討論に移り論題としては「信仰の地的に形式を設くるの可否」各自名論卓説交々至り大回の宿題として散會せしは十一時半頃なりき

▼婦人修養會 九月七日午後七時より本行寺に於て開會せり會者三十餘名定刻高木本願師は「本宗婦人の心得」を題して詳々訓示教説さるる所ありそれより討論に入り「色論」に就て各自意見を吐露し散會せしは十一時半なり

▲監督布教一行の歸山 曠きに和氣、美作、並に山陰方面を遊教されたる能仁齋正山名木信師の一行は松崎中川兩氏送別會並に彼岸會施行の爲め九月六日一先づ歸山せらる

▼松崎、中川兩師送別會 今回能仁齋正徒弟松崎寺成師の品川妙國寺に中川事顯師の東京帝國大學に、何れも遊學の途に就つるに際して、同信の士女はその行を壯にせん爲め九月六日午後七時より本行寺に於て送別會を開會せり會者六十餘名席定まるる發起者の挨拶ありそれより山海珍味の膳臺に對するや三四信女が杯盤の間を旋遊し宴漸く醒なるや松崎中川二師の謝辭あり次で森安、横山、小西、池上、山名諸氏及び婦人會を代表して大野蓮等の送別の辭あり最後に能仁上人より一同に

挨拶を發して謝辭あり各自胸襟を展ひて歡談英語の裡に穿鼻度散會せしは十二時半なりき

▲日蓮研究会 九月十七日午後七時より本行寺に於て開會集者五十餘名能仁會長長席に著き一同の着席を以て宿題「信仰の野境に形式を設くるの可否」各自甲論乙駁の結果可論多數散會せしは十時半頃なりき

▲野田紀念演說會 同日午後一時より津浦郡野田村に於て大演說會を開く野田は維新勤王の流行せる地なるも昨年の本日、以て野田の改革歸依者起り本宗の正信仰に入る者數萬一少年の祝賀紀念演說の標榜にて大演說會を開會之辭

井上浩郎八  
須山茂三郎  
作 錦次  
横山鐵太郎  
高木 本願  
能仁 事一

我宗教義の特長  
本佛國恩の妙觀  
各自熱心に長廣舌を振はれたるが七十有餘の聽衆に何れも感動の色を現せるを見受けたり

▲婦人修養會 十八日午後七時より本行寺に於て開會會者六十餘名修行法の後能仁講師より一巻の講演あり

▲日蓮講會 同十八日午後一時より本行寺に開會第六高等、醫學專門、師範、中學等の各學生を中心とする同會の事として研究者の眞面目に實に感ずべきものあり定期會員及會長の演說あり即ち左の如し

偉人研究と全我的態度 小西 三

日蓮主義と日本魂 伴 錦次  
日蓮研究に對する吾人の態度 横山鐵太郎  
日蓮研究の方針(上人の兩面觀) 能仁 事一

各自の演說終りて茶話會に移り席上高木本願師の日蓮研究に就て本多大僧正の教訓を語る其他日蓮研究の參考書等を論議し散會せしは五時半なりき

▲佛敎演說會 毎月定期一回の同例會は二十日午後七時より山崎町本行寺大廣間に於て開會せられたり紳士及演題は

小西 憲三  
横山鐵太郎  
高木 本願  
能仁 事一

在來中の雜感  
日本國民の法華經的自覺  
如法思國の靈光

▲彼岸會大法會 例年の通り秋彼岸會大法會は初日を以て御津郡白石村に於て宗祖御眞蹟の大本尊を安置し奉り善男善女多數の集合あり、中日正會には本浦山なる本行寺に於て能仁齋正の導師に依り大法會あり説教法華法雨多く潤ひ結願日を以て内山下願本第二岡山弘通所に大法會も施行せり

▲樹木無教會 本縣下は宗門の寺院少く且つ微小なる爲め教勢常に振はざるも昨今宗徒は其天職を自覺し隨方弘通に努力しつゝ、あり七月三十日布教師恭啓門師職員大川日教師一行は講演を開始し本經寺を始めとして北島根澤村龜梨砂福寺、同寺檀家鈴木須左氏宅訪問布教、岡村上崎時砂福寺、全寺檀家見家訪

岡布教、茂木町本岡寺、同寺檀家齋藤氏宅訪問布教等各所を巡回して晝は道路布教夜は公開演說を開催して到る處に法益を興へ八月五日宇都宮市に於て晝は道路布教を爲し夜は當市の公開堂たる旭館にて大演說會を開けり演題及紳士は左の如し

一 開會之辭 幹事(木村義明)

一 大日本國と日蓮上人 山口 安雄師  
一 情の日蓮上人 芝留 端真師  
一 宗教發展の時機 大川 日教師  
一 佛院の本體 萩原 啓門師

六日晝間道路布教夜間は法華寺に於て大演說會開會

一 顯本法華 木村 義明師  
一 日蓮主義とは何ぞ 大川 日教師  
一 播折二門 萩原 啓門師

元來當地に甚しく宗教心の薄き處なるも萩原師始め諸師の熱心なる道路布教は多大の効果を奏し夜間の演說會は二回共に推期以上の聽衆を得たり

九日資藏寺の篤信家鹿島館にて晝間大演說夜間道路布教を開催し多大の法雨を潤ふしたりと云ふ

會を告げたり二十七日本光寺に演說會を開き石川荏用兩布教師及今成齋正の宗旨上の信仰安心に就て懇切なる講話ありたりと云ふ

▲房州布教 房州は聖祖降誕の靈地にして日蓮主義を奉ずるもの、留意一審を要すべきは勿論なるも概して我日蓮教團の勢力萎靡として振はざるの狀態に在り同地に於て法華宗の寺院三十七ヶ寺を有するも精神の運動のために努力するものなく僅かに習慣傳教を維持し兼地としての房州に既に其光りを失ふて心的航海は朦朧に包まれて針路を知るに由なきが如し房州布教に現下の急務なりと信ず九月二十九日館山町本蓮寺に於て大講演會を開けり

國民師表者日蓮上人 三上 義徳師  
野口 日主師

聽衆は二百五十餘名講師は房州人の地位より我き起して聖祖の大人格を紹介し其主義教義の卓越せる所以を論明し覺醒の響きを興へたり翌三十日斃死者追悼會を修したる後

佛院信仰の功德 三上 義徳師  
野口 日主師

前日に同く満堂立座の地なき程の聽衆にてさすがは歴史上習慣的に偉人の人格を耳にし亦現實の靈韻存することなれば猛者の轉醒を加ふるあらば翻然として偉人の子孫たるを自覺するに至るべし固みに館山北條の日宗寺院六ヶ寺に今後聯合の態度を以て教勢擴張に努力すべしと云ふ

▲千葉縣布教 同縣布教師は客月來水難救助講演會を各地に開き日蓮主義と實社會との交渉及救濟事業の關係に就て實際的に其意義を鮮明にし到る所其意義を諒し種々の名稱によりて同情の金品を水難地に送りたるもの多しと云ふ

▲水害救助義舉 京都日宗同志會は有志を説きて集めたる金百餘圓と同情袋一千二百圓は九月下旬東京市役所へ發送したりと云ふ岡本本行寺婦人會は本宗事務廳へ宛て救助金を送附せらるるに奇特の行爲と云ふべし追て宗内水害狀況調査の上配分するに至るべしと云ふ

千葉縣山武郡福俣本福寺檀家にては各義金を歸出し金貳拾圓を本國へ宛救助配分を委嘱し來れり追て水害地へ向け配送するの都合也

▲監督布教師巡教 能仁事一師は紀野職員を伴ひ九月二十八日岡山を發し三十日間の歴定にて金澤地方より巡教を開始せられたり、あり齋正野老初教師は川崎其師を隨ひ十月二日京都を出發し定養庵に一宿し四日上野野汽車にて北海道に巡教の途に上りたりと云ふ

### 教學財團基金受領報告

第三十五回 (四拾三年八月三十日)

- 金壹百圓(七)
- 金壹拾九圓(四)
- 東京小石川本念寺住大須賀芝遊
- 全貳拾五圓(二完)
- 全寺壇家 増山 庄吉
- 金四拾圓(四) 東京淺草慶印寺住 山根 日東

金貳拾圓(四) 全本郷願本寺住 山崎 日隆  
 金五圓(四) 全寺壇家 小泉藤三郎  
 金拾圓(卷) 全品川妙國寺壇家 岩井 フサ  
 金四拾圓(一) 千葉縣國府關法泉寺住 藤平 法順  
 金五圓四拾錢(四) 全縣上野妙興寺住 大津 賢淳  
 金四圓(內) 全寺壇家岡本岩吉外十九名  
 金貳圓(一) 全縣榎神房真福寺壇家中  
 金參圓(二) 全縣幸田本光寺住 片岡 義慎  
 金八圓(卷) 京都市善量寺壇家 入江治三郎  
 金貳拾圓(三) 東京淺草圓常寺壇家 清水佐太郎  
 金五圓(一) 神奈川縣大豆戸本乘寺壇家中  
 金八拾圓 千葉縣沼向 長 福 寺  
 金貳拾圓 石川縣金澤市本覺寺壇中  
 ◎岡山縣和氣本成寺壇家  
 金四圓宛 金谷猪三治 弓削辰丸 金壹圓宛  
 平松剛太郎 山形榮吉 佐々木叔平 金七  
 拾錢 佐々木剛太郎 金四拾錢宛 畑孫四郎  
 平松鹿太郎 山上藤三郎 寺見隆治 岡田  
 作太郎 金谷吉治 佐々木淺次郎 金貳拾錢  
 平松安太(以上第四回) 金八拾錢 片岡宗藏  
 外三名(第三回)

全壹圓宛 武藏宮五郎 吉原時太郎 全孫三  
 郎 全壹圓 飯高富太郎 佐瀬三藏 篠澤定  
 吉 全貳圓次(第一回)  
 ◎同縣御門妙善寺壇家  
 金壹圓 子安牛之助 八拾錢 宇津木善之助  
 六拾錢 全志五郎 四拾錢宛 今友右衛門  
 石井内藏司 六拾錢 宇津木桃太郎外二名  
 (第一回)  
 ◎同縣柴名蓮華寺寺壇  
 金參圓宛 住職齋藤義監 井桁セト 内藤セ  
 一 金拾圓七拾錢 全寺壇家中(第三回)  
 ◎同縣貝塚蓮成寺寺壇  
 金拾圓 住職小橋親正(第一回) 金四圓 加  
 藤良吉 高山吉次郎 中村輝江 金參圓 中  
 村小一郎 金貳圓 田中藤太郎 田中清一  
 中村傳司 中村吉太郎 中村隆三 中村つね  
 加藤傳四郎 齊藤巳之吉(第二回) 金參圓  
 中村巳之吉(皆同)  
 ◎同縣小谷流永福持壇家  
 金五圓 酒和教盛 四圓 赤地保藏 貳圓  
 山本由太郎 壹圓 牧田覺次郎(第一回) 四  
 圓 山本友三郎(第二回)  
 ◎岡山縣草生久成寺壇家  
 金貳圓四拾錢 橋原安次郎 貳圓宛 橋原初  
 次郎 安光孝太郎 高原百造 壹圓宛 橋原  
 武四郎 全住造 全忠藏 八拾錢 安光彌三  
 郎 六拾錢宛 長田鐵太郎 下山爲造 五拾  
 錢 下山倉太 四拾錢宛 橋原嘉吉 全五圓

這 全只次郎 全棟太郎 安光音吉 全末吉  
 全登茂 下山馬市 河原八十吉 參拾錢宛  
 明石いし 長田さわ 高橋與作 橋原市右  
 衛門 全才一郎 全禮造 土手砂五郎 河原  
 彌助 壹圓 橋原はな外四名(第三回)  
 ◎京都市榎木町成就院壇家  
 金五圓宛 吉田やす 小野まみ 秋篠藤三郎  
 藤野玲次郎 參圓 山中たみ 貳圓 殿村  
 丑之助(第一回) 金五圓宛 渡喜三郎 中西  
 次郎 大橋松次郎 壹圓半 藤田八重(第  
 二回)  
 ◎京都府木崎大乘寺壇家  
 金壹圓六拾錢 德田善任外二名 壹圓宛 田  
 中吉兵衛 全彌吉 參拾錢宛 田中熊治郎  
 全虎吉 八拾錢 田中岩次郎外三名(第四回)  
 ◎兵庫縣姬路妙立寺壇家  
 金五圓 多田耕(一) 四圓 結梗金次 貳  
 圓宛 水野乾誠(三) 有田十九松 八杉爲次  
 郎 對馬安太郎(以上四) 壹圓宛 杉山キン  
 淺田嘉助(以上三) 竹中テイ(四) 平野ク  
 ニ(二) 卷)  
 ◎同縣同妙善寺壇家  
 金六圓 高島邦平 四圓 山中政吉 貳圓  
 岩田辰次(以上第三回)  
 ◎静岡縣北松野抄松寺壇家  
 金五圓 住職土屋賢生 貳圓宛 小川友次郎  
 字佐美千代吉 佐野龜作 壹圓宛 田中秀



◎望月宗吉 田中貞吉 天野傳作 小川京  
 作 同澤十 高岡由太郎 六拾錢宛 望月由  
 太郎 沼田千代吉 五拾錢宛 田中日御 白井  
 多作 全繁太郎 全百太郎 全竹次郎 佐野  
 月三郎 字佐美房松 全幸作 全藤吉 朝比  
 奈松藏 石川徳太郎 四拾錢宛 望月彦作  
 久保田子之作 全乙吉 渡邊彦太郎 深澤廣  
 吉 參拾錢宛 田中金作 佐野萬吉 天野貞  
 治 吉田鐵右衛門 字佐美長吉 全久太郎  
 田中龜太郎 小川喜一 全藤太郎 石川運作  
 全吉太郎 高岡幸作 全松次郎 木内清作  
 全郷三郎 望月國太郎 全藤藏 大島鐵太  
 郎 蓮池福太郎 八拾七錢五厘 深澤由  
 太郎 外百七十五名分合計(第七回、第七、八回  
 分共)

▲日蓮宗全書第三次刊行報告▼

標祖書綱要刪略 正 議 會 本

原本九卷 合本五百五十頁 實價壹圓五十錢 和裝一圓四十錢 送料八錢

●既刊書豫備殘本あり希望者に頒つ●  
 祖書綱要の出来るや五百年來教理發展の潮流は悉く是に朝宗し一家教學の組織  
 粲然として茲に整備大成するを見る真是萬代の總鏡學界の指南たり優陀那和  
 尚本書を推稱して宗門曠古の美説といひ在家出家初學者必讀の寶典となす本  
 刊書は原選廣本を以て修補校訂を施し綱要正義二卷を加へて會本となし新に  
 條簡を設け別に新撰類從索引廿余紙を附録とす本索引の編製は系統的分類配  
 列の様式に據れ宗學辭典として應用自在なるべし殊に布教家にあり  
 るを以又一部の宗學辭典では教理に信條に當面の問題に關する根本  
 的解釋を求め的確にして富藏なる智識を得るに於て最も便利なるものあらむ

日蓮宗全書出版會

東京市京橋區疊町 須原屋書店内

振替口座四九六〇番 電話本局三三七五番

# 顯本法華宗要品 附回向文 完

上製一部 貳拾貳錢 並製一部 拾四錢 郵税不要

右品切の處第八版出來せり凡そ純善の信仰生活に入らんとする信士は經文を拜讀して無限の妙味を感識し菩提の資糧を獲べきなり篤信者にして御注文の際は迅速發送致すべく候

## 發行所

### 慶印寺

東京市淺草區新谷町十四番地

賣捌所 統一團 鈴木大次郎  
同市日本橋區濱町三丁目五番地

# 日蓮聖人靈蹟寫真帖 全

日蓮宗布教院長 子 小笠原長生君序文  
旭日苗師題字 日蓮宗大學長 稻田海素師序文  
日蓮宗大學長 學教授 顯本法華宗管長 同 講師 荒木秀明師編纂  
本多日生師題字

天地八寸五分巾一尺二寸五分綴子表紙大和綴裝訂頗優美美術精巧寫真版百十餘個箱入  
◎定價金五圓 內地小包送料金貳拾錢 百部限 特價金三圓八拾錢

日蓮門下には古來完全なる靈蹟畫帖なし今其缺を補はんか爲收る所の古刹名畫は最も美麗精巧なる寫真版的確なる説明により現はさる一度之を繕かば聖祖一代の偉徳を思ひ靈感自ら起り宛ら實境を拜するの思あらん敢て一本を薦む僅に百部あるのみ

## 勤行作法

勤請文、受持文、○自我偶唱  
同向文、受持文、○自我偶唱

右は各派統一の理想の下に本多日生師の編纂せられたるものにして、勤請文、同向文の如き最も簡潔にして而も其要義を逸せず總振假名付なれば初心の行者の所用として最も適切なるもの今回本會に於て會員の爲めに印刷に付したるを以て其殘餘數百部は一般信徒の爲めに之を願たんとす、御入用の方は前記代金を添へて御申込ありたし

發行所 東京市淺草區北清島町十四番地 妙教婦人會

每月一回十五日發行、一部金六錢 郵税五厘 一ヶ月前金六拾五錢郵税六錢 代金ハ振替貯金口座東京一二一九番へ拂込マレ  
※此場合ニハ送料ノ外ニ金壹錢ヲ添付相成度候

發行所 東京市淺草區北清島町十四番地 統一團  
發行日 井村日成 編輯人 山根日東 印刷人 鈴木日雄

宮殿●須彌段  
前机●幢幡  
大販賣  
御來店の節は陳列場へ御來車被下度は是れ迄とは一層勉強仕一切各宗の佛具陳列仕置候



## 正價三法堂佛具發賣目錄

佛具と唱すれども此の種類數有之候を以て一々記載す能はず。依て特に佛具正價附發賣目錄書を作製致置候に付御入用の諸君に。券四錢御送附被下候は、迅速運呈仕候。此の目錄を御覽あれは。寺院様方の御入用品一切の買物程遠方でも坐ながら買物安價にてき升。早く取らせ御覽あれ其の正價附の品は。右の通り。

- 佛具一切 過去帳の類 大般若經 一切藏經 經題分 位牌 ●大般若經 佛具一切 釣鐘 ●半鐘 ●木魚 ●拂子 ●曲篋 ●香爐 ●大傘 ●太鼓 ●中尊響洞 ●金剛杵 ●水引打敷 ●和經 ●唐經 ●人天蓋 ●樂器類 ●鏡 ●佛龕 ●佛座 ●木像 ●樹子 ●木手 ●盤子 ●香盤 ●行鉢 ●盤 ●白鉢 ●三寶鏡 ●平鏡 ●剃髮鏡 ●茶湯器 ●煎茶器 ●香具類 ●正價附にして板 ●佛物 ●高麗 ●製文庫 ●製香爐 ●製香具類 ●正價附にして御買物全ながら自由自在

佛具卸部 東京都三橋 本舖 三法堂藤田總次  
通小橋西入  
特電話二千七百八拾三番 振替貯 大阪二四二五九  
同市三橋 金番號 東京二〇七七一  
通大橋西入 三法堂佛具陳列場

小賣部 同市三橋 三法堂佛具陳列場



# 統一



第百八十九號

明治四十三年十一月十五日(每月一回十五日發行)

(東京) 三島印刷株式會社印刷